

# 平成27年度沖縄群島病害虫発生予報第7号(10月予報)

## I 10月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	30	30	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	30	40

(平成27年9月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	25.2	27.9	23.1	152.9	169.6

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

## II 10月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 カンショ

○ イモキバガの防除対策

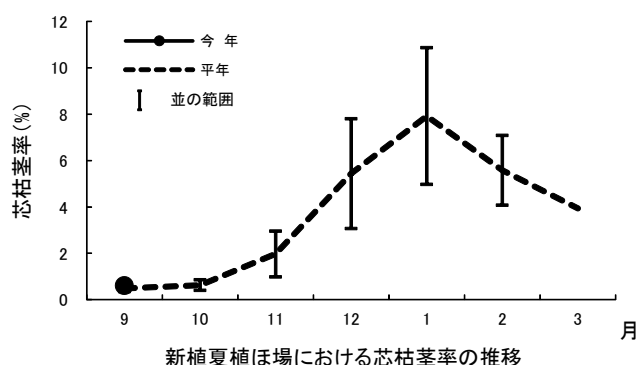
- 発生初期の防除が有効であり、被害葉が目立ちはじめたら、薬剤散布する。
- つづった葉の内部に潜んでおり、直接薬剤がかかりにくいいため浸透移行性のある薬剤を使用する。
- イモキバガの他に、ナカジロシタバ、エビガラスズメの発生が見られるので、適宜防除する。

### 2 さとうきび

(1) イネヨトウ

発生の程度 : 並  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は0.6%(前年0.6%、平年0.5%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 卵は塊で産み付けられ、ふ化した幼虫は葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、

茎と葉元の上に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。

- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。

### 3 温州みかん

#### ○ ミカンハモグリガの防除対策

- a 9月中下旬の調査の結果、一部ほ場で多発した。
- b 年間10世代以上を経過し、新芽の出る頃から12月頃まで見られる。
- c 被害は新葉・若葉に発生しやすく、多発すると伸長を著しく阻害する。
- d 新芽の展開初期から防除する。

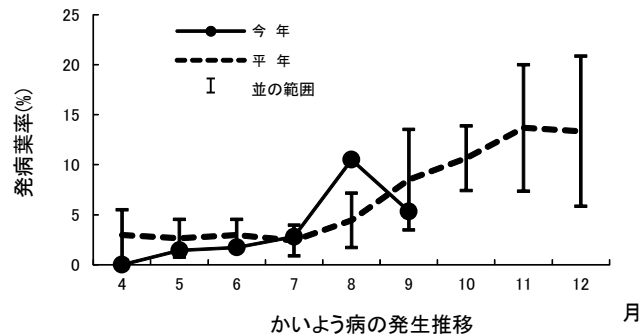
### 4 タンカン

#### (1) かいよう病

発生程度 : 並

予報の根拠

9月中下旬の調査の結果、発病葉率は5.3% (前年28.9%、平年8.4%) と平年並であった。



#### <防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

### 5 マンゴー

#### ○ チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 9月中下旬の調査の結果、葉あたり虫数は3.4頭(前1.8頭、平年3.4頭)と平年並であったが、一部ほ場で多発した。
- b 黄色粘着トラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.9頭(前年1.4頭、平年3.9頭)と平年よりやや少なかった。
- c 不用な新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- d 新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- e 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- g 平成27年度病害虫発生予報第5号(平成27年7月27日付)コラム参照。

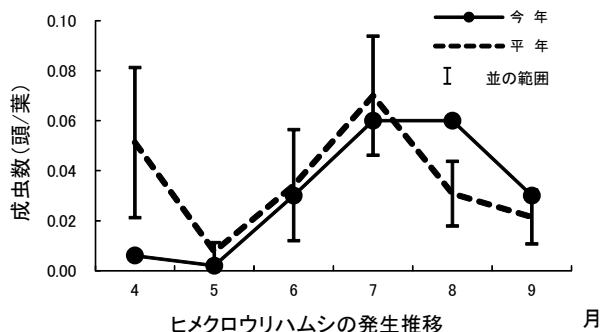
#### ○ ハダニ類の防除対策

- a 9月中下旬の調査の結果、葉あたり虫数は0.3頭(前年0.1頭、平年1.1頭)と平年並であった。
- b 夏から秋に発生が多くなるため、発生が見られる場合は薬剤による防除を行う。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

## 6 へちま

- (1) ヒメクロウリハムシ  
発生程度：並  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.03頭(前年0.02頭、平年0.02頭)と平年並であった。

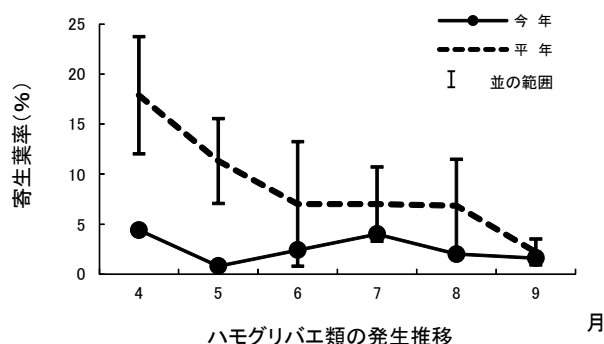


<防除上注意すべき事項>

- シルバーテープなど光反射資材を利用し、成虫の飛来防止に努める。
- ほ場内外のウリ科雑草は発生源になることから、根も含めて除去する。
- 産卵防止のため、地際部をシートなどで覆う。

- (2) ハモグリバエ類  
発生程度：並  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、寄生葉率は1.6%(前年2.4%、平年2.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- 幼虫期間が比較的短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。

## 7 トマト(施設)

- タバココナジラミの防除対策
- 9月中旬の調査の結果、定植直後のほ場において発生が確認された。
  - 本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
  - 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
  - 施設開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
  - 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
  - 幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
  - 薬剤散布の際にはマルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
  - 平成27年度病害虫発生予察第7号(平成27年9月28日付)コラム参照。

## 8 オクラ

### ○ うどんこ病の防除対策

- 9月中旬の調査の結果、発病葉率は22.4%（前年4.3%、平年1.0%）と平年より高かったが、発病度は6.0と低かった。
- 老葉や病葉は発生源となるので、ほ場内に放置せずビニール袋に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。

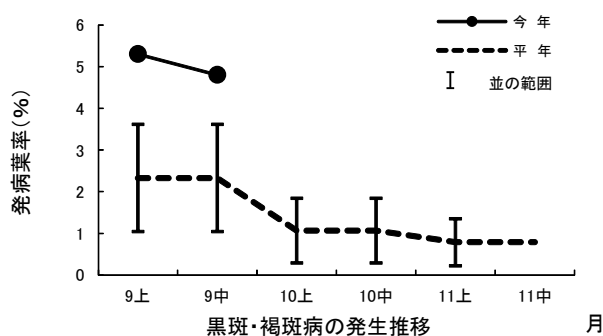
## 9 小ギク

### (1) 黒斑病、褐斑病

発生程度： やや多

予報の根拠

- 9月上、中旬の調査の結果、被害葉率は上旬5.3%、中旬4.8%（前年3.1%、平年2.3%）と平年よりやや高かった。
- 一部ほ場で多発生が見られた。



#### <防除上注意すべき事項>

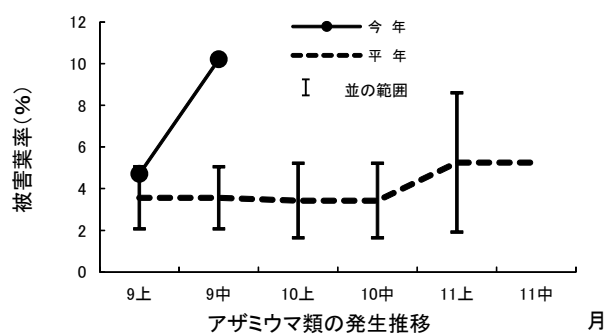
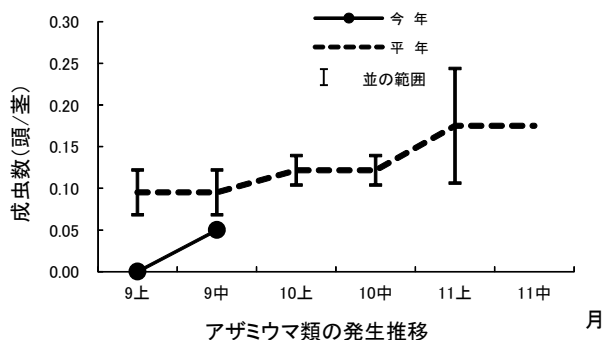
- 発病葉や摘葉等による残渣は発生源となるため、ビニール袋などに入れるなどして早めには場外に持ち出し処分する。
- 除草などにより、ほ場の通風をよくする。
- 水滴の跳ね上がりを防止するため、敷草を行う。

### (2) アザミウマ類

発生程度： やや多

予報の根拠

- 9月上、中旬の調査の結果、茎当たり成虫数は上旬0頭、中旬0.05頭（前年0.03頭、平年0.1頭）と平年より少～やや少であった。
- 被害葉率は上旬4.7%、中旬10.2%（前年3.2%、平年3.6%）と上旬は平年並、中旬は多発生であった。



#### <防除上注意すべき事項>

- 苗の段階から葉にアザミウマがついていることが多いので、苗床での防除を徹底する。
- 定植時に粒剤を施用する。
- 採穂後の親株ほ場はアザミウマの発生源となるため、薬剤散布後、すみやかに片付ける。

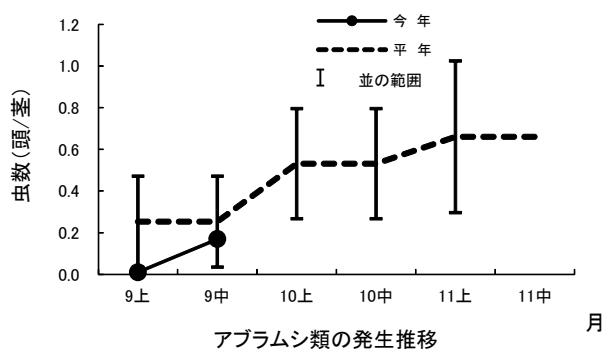
- d 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- e 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる生長段階であっても、同時に防除を行う。
- f 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。

(3) アブラムシ類

発生程度 : 並

予報の根拠

9月上、中旬の調査の結果、茎当たり虫数は上旬0.1頭以下、中旬0.2頭(前年0.1頭以下、平年0.3頭)と平年よりやや少～並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- b シルバーポリテープを畦上に張り出すか吊したり等して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- c 早期発見・早期防除に努める。

○ チョウ目幼虫の防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、一部ほ場でウワバ類の幼虫による葉の食害がみられた。
- b この時期からハスモンヨトウ、オオタバコガなどの発生も増加する。
- c 発生源となる、ほ場周辺の雑草を除去する。
- d ほ場をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。
- e ハスモンヨトウやオオタバコガは薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。